

奥にある光

4組 パスワール・ドミニ格斯

ジョナサン・ジョアニ

「勝負は時の運」とよくいいますが、みな

さんはどう思いますか。このことわざは「勝

ち負けはその時の運」によって変わるから、力

の強い者が勝つとは限らない」という意味で

使われています。しかし、私たち人間に制御

できない、運という働きが、自分の勝敗を決

めるという考えはどうでしょうか。私は、勝

負の結果が決まる時には、運よりもっと具体

的な何かが作用すると強く信じています。

勝負といえればスポーツのように、汗をかき

ながら体を使って勢いよく相手と戦って勝敗

を決めるというイメージが強いのと思います

が、そんな物理的な勝負よりもっと克服しにくい

勝負があると思います。それらは人によって

違う、日常生活で直面する問題です。私の場

合、今取り組んでいる勝負は日本語です。漢

字になじみのない国から来た私の経験からい

うと、漢字を学び始めて、乗越えられたい大きさな壁にしお思えませんでした。とはいえ、毎日練習を重ねて日本語が上達していくと、「や」と日本語で文章が読める」というレベルに達することになります。

しかし、この素晴しい国で生活し始めてから、漢字よりも言葉の背景にある正しい使い方やニュアンス、文化をきちんと把握することの大切さに気づきました。相槌の打ち方がその一例です。日本語の本で、相手の言うことに対して自分の同意の気持ちを表す言葉は「なるほど」という言葉があると知って、私はそれをそのまま暗記しました。ある時、目上の方はいろいろな話を聞かせていただいた時に「なるほど、なるほど」と、何度も相槌を打っていただけ、話が終わってあとで優しく「目上の人に対してなるほど」と相槌を打つのは失礼です。目上の人と話す時は使わない方がよい。」と注意され、恥ずかし

い思いをしました。このように、私はよく敬語を間違えたり、場違いな相槌を打ったりしてしまいます。他に例を挙げると、友達のお宅でご馳走になった時にお箸を持ったまま手を振るのはよくありません。これからはしないうにしたりがよいと思いますよ」と親切に指摘された経験もあります。こういうことがあつたたびに私は日本語の勉強の壁の高さを感じます。でも、通つていふトニホルが暗くても諦めずに頑張り続けられればいつか必ずトニホルの奥に光が見えてくると信じ、つまずいても日本語の勉強に励もうと決意しました。

「頑張つていふうちに問題の解決が出てくる」という事は個人的な経験からだけではない。ここ数年私の国で起きていふ目覚ましい現象からも証明できます。

私の国は開発途上国で、社会の発展を妨げる問題がいろいろあります。そのひとつは非

識字率です。ドミニカ国家統計局は2010年に「15歳以上の12.8%が非識字」と発表しました。読み書きのできていない人の中には若い人も含まれており、早急に何か対策方法を考へなければなりません。これに政府が（キーン・ジャ、共に学ぼう）と、Q ui s q u e y a A p r e n d e (o n t h g o) という識字教育計画を立ち上げ、ボランティアで教えた人や、既に教育に携わっている人々を募集して、その人たちに読み書きを教えるための訓練を施しました。それから調査で読み書きのできていない人を探して、無料で読み書きを教える活動を開始しました。この計画を行った機関の報告によると、2013年に非識字とされたのは5万人のうち、2015年2月までに77万人以上がこの計画から利益を受けました。また、去年の2月から11月まで、政府の下に510校、7045教室が新しく建設されました。このように、この分野も確かに、「意志あるところは道あり」といえるでしょう。

とはいえ、児童労働、貧富の差、なじ、解決
しなればならない問題が私の国にはまだま
だありません。しかし、問題の大変さにおびえ
て自分解決しようともせずには自然に片づくの
を待つわけにはいきません。これは人生のど
んな点においてても通用する考えだと思います。
「力の差がありすぎて勝つわけがない」と思
い込む人間よりも、「力の差があるのはわか
らぬが、やってみないことは結果がど
うなるかわからないから、頑張ろう！」とい
う考え方をする人間の方が勝利を収める確率
が高いのです。このように考え、拳を握って
未来と向き合っていけば、人生のトンネルが
暗くて迷う時がある、暗闇しかならないと思
っている中にも奥にある光がさかると輝いて
出口へとつながる道を照らしてくれようしよ
う。